

仙台陣屋かわら版

第六十九号

(平成二十二年十一月号)

HP: <https://www.town.shiraoi.hokkaido.jp/ka/jinya/> Mail: jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp
〒059-0921 白老町陣屋町六八一 TEL&FAX 0144-851-6666 仙台藩白老元陣屋資料館発行

〈特集〉

平成二十二年度しらい歴史講座

第二講 「こんな博物館を夢見てる」

前号でお伝えしました、しらい歴史講座は、第一講「ふるさと」、この心地よい響き」を皮切りに九月十八日から開講しておりますが、第二講「こんな博物館を夢見てる」では、これまで聴く立場にあった受講者の方々を交え、個人が思い抱く・思い描く郷土資料館の在り方について討論をいただきました。

受講された方々は皆さん生涯学習に関心が高く、歴史・博物館学・郷土・アイヌ文化などに造詣の深い方もいて、予想以上に内容の濃い、積極的な発言あふれる講座となりました。

- ・ 博物館は自治体における大切な要素。白老町の二箇所の博物館は、町民利用が少ないのではないかと。また、海外からの客を呼ぶ努力も必要だろう。

・ 学校では、学外事業の時期が決められている。展示内容も子供には敷居が高い部分がある。

大きく、子供たちの来館に配慮した展示企画がある嬉しい。

- ・ 先住民に関する内容を、自治体としてどう考えて行くかは大切なこと。アイヌ民族博物館の存在に依拠してはいけない。連携・分担を含め、町としてどう捉え、位置づけるかは再考しなければならぬ。

- ・ 屋根のない博物館構想を改めて活かせるよう、反省・見直しを含めた検討が必要。協力者を増やし続けるべき。町全体を博物館とする屋根のない博物館として発信している白老町だからこそ、よりの多くの協力者を得て行く必要があるのではないかと。

以上、博物館に対するジョンの曖昧さを指摘する声が多く聞かれました。まだまだ課題の多い「博物館行政」の姿が改めて浮き彫りになりましたが、白老町の発展のためにも皆様から寄せられたご意見を活かしていきたいです。

第三講 「百聞は一見に如かず」

第三回目の講座からは、再び中村齋氏の講話に戻りました。タイトルにもあるとおり、今回まず強調されたのは、博物館資料における「説得力」

です。例えば農機具の鍍くわにしてみても、何一つとして「同じもの」はありません。中村氏は「使った人によって、減り具合が違う」と述べ、A氏とB氏それぞれに違う情報を引き出せることに注意を促しました。またその中で、資料は町民共有の財産としてのみならず、個々の系譜における財産としても成立し、祖父や祖母、もっと遡った先祖の事跡を知る媒体となり得るのです。壊れたもの、素晴らしくないもの、“優良ではなかった成績”が記載されたもの、そうした全てのモノが、有益な情報の詰まった資料と言えるのです。また、資料的性格の観点からは、その保存の重要性は行政文書にも及びます。平成四年に刊行された『白老町史』の編纂委員を務めた学生は、「ある程度の昔までは文献が整っていたし、諸先輩の助言もあったので作業もはかどった。しかし明治時代ぐらいつい古くなると、全く資料が乏しいんですね。終戦を境にして、文書が廃棄されてしまったから。だから新聞を参考にしていた」と、当時の苦勞を振り返りました。

資料を見直したときの感動は、きっと何歳になっても変わらないでしょう。秋口に公開が始まって、既に五十万人の来館者を数えた箱館奉行所も、紆余曲折を経て帰還したへはやぶさくへの注目度も、“一目見たい”という想いが足を運ばせているのだと思います。白老町の資料に町民がそうした想いを寄せられたなら、とても素晴らしいことだと思いませんか？

第四講 「白老町での郷土学習法」

本年度最終講座では、今までの講座をふまえた上での総括をおこないました。将来の「白老郷土博物館」建設を夢見、現在郷土博物館のない白老町で、郷土博物館学習を進める方法を模索するものとなりました。

中村齋氏は、「子どもは日々生まれ、日々成長しており、生まれたときから教育が必要。何年計画というものではなく、あまねく人々に学習の機会を提供することにはならない」と語りました。そして、郷土博物館のない白老で博物館機能を持たせるには、既存の博物館、展示等を活用すると同時に、町内の文化サークルの活動等との密な連携が求められるとし、実現には情報の収集と提供のほか、支援等をおこなっていかねばならないとしました。また、郷土博物館の設立準備委員会結成や資料所在のリスト化など、郷土博物館設立に向けての具体的な提言がなされました。

参加者からは山積している問題がいっぱいあるだろうけど、市民の力を利用して少しずつでも行えば不可能なことではないと感じたという声や、今回の講座のように郷土博物館設立への動きをしていることを、もっと多くの市民に知ってもらうことも一つの手ではないかという意見が挙がりました。

総括く平成二十二年度しらい歴史講座を終えて

今年度は四回の連続講座として、九月十八日からおこなってきました「しらい歴史講座」も、

十月十六日をもって終了となりました。ご多忙の中、講師を引き受けてくださったアイヌ民族博物館館長の中村齋氏には、改めて感謝を述べると共に、今後とも白老の発展にお力をお貸しいただきたく切に願います。また、講座にご参加、ご協力してくださった皆様、ありがとうございました。今後どうぞ宜しくお願いします。

虎杖中学校へ出前授業。陣屋の歴史が解ったかな？
「白老って、どんな形だと思えますか？」
試みに投げたこの質問、想像していた以上に面白い反応がありました。
仙台から出兵した藩士たちが、白老を陣屋建設の地を選んだ理由。そこには太古の火山活動が形成した町の八割を占める山(台地)と、河川の浸食による深い谷戸状の地勢が、大きく影響しています。鋸(のこぎり)の歯を思わせる凹凸に富んだ地形、仙台藩士が偶然、白老に“お城”を建てたのではないことが解ってもらえたでしょうか。お昼休みの後なので、眠たそうな生徒もいましたが、みんな最後まで真剣な表情で話を聴いてくれました。ありがとうございました。

講座で得た皆様からの貴重なご意見・ご感想を胸に、白老町の博物館として誇れる取り組みをおこなっていきたいです。講座に参加された方々だけではなく、市民の皆様、白老を訪れる方々からの叱咤激励が資料館を支え、町を発展させていくのではないかと考えます。

資料館では、色々楽しい催しもおこなっています。ちょっと遠いかも知れませんが、お友達と誘い合って遊びに来て下さい。

十一月の白老地域文化大学は：

次回の白老地域文化大学は、十一月十三日(土)のいつもの時間帯で開講します。白老軽種馬農協の方から、活躍著しい白老産サラブレッドについてお話をうかがいます。

真冬でも身体から湯気を立ち昇らせつつ、たくましく躍動する馬の話を耳にすれば、きつと寒さも吹き飛ぶことでしょう!! みなさんのご参加をお待ちしております。



「仙台陣屋かわら版第六十九号(平成二十二年十一月号)」

発行日：平成二十二年十月二十一日

発行所：仙台藩白老元陣屋資料館 担当者：平野・干場